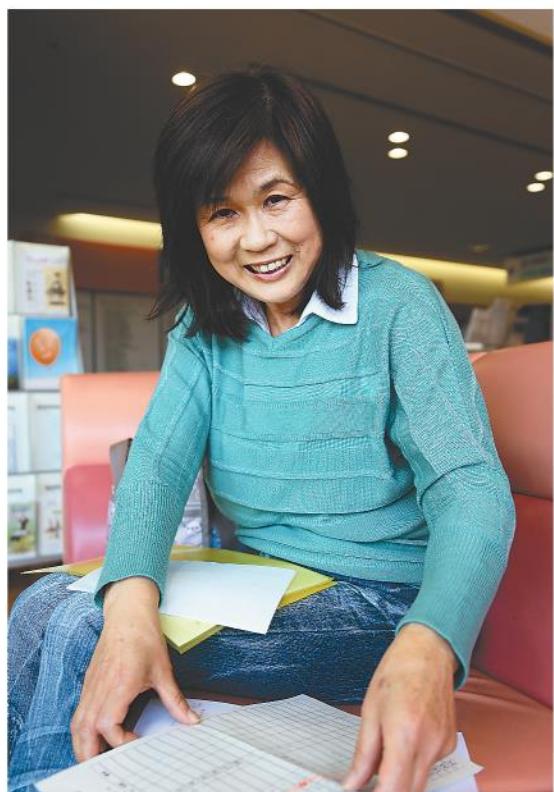


高島市の野崎安美さん（58）は、県大津・南部農業農村振興事務所（草津市）に勤務する職員。現在は子宮頸がんの治療を受けながら、農作物を加工食品にして農家の所得増につなげる技術支援をしている。

がんと闘いながら仕事を続けるのには、わけがある。長浜市内で働いていた46歳の時、乳がんと診断され、入院や自宅療養で10週間仕事を休んだ。当時は書類作成などのため、職場に一人一台パソコンが導入された時期。少しでも操作に慣れようと病室にパソコンを持ち込んで練習を繰り返したが孤独感は募った。『仕事をしていないだけで社会から隔離された

（58）は、県大津・南部農業農村振興事務所（草津市）に勤務する職員。現在は子宮頸がんの治療を受けながら、農作物を加工食品にして農家の所得増につなげる技術支援をしている。

## 長引く治療 募る孤独感



子宮頸がんの治療を受けながら仕事を続ける野崎安美さん＝守山市で

## 早期発見の重要性訴え

を進めてほしい

野崎さんは自身のがんの経験を積極的に話すよう心がけている。仕事の中で、がんを経験した農家の人と出会い、「2人で元気に働くね」と励まし合ったこともあるという。「がんでも働ける」という自分の姿を見てもらい、同じ立場の人にならうとしても勇気を与えていた。そんな気持ちで今、仕事に取り組む。

**働きたい**  
がんと就労

3

ように感じた」と振り返る。今年1月、職場の健康診断で新たに子宮頸がんだと分かった。子宮の全

でも1カ月の入院が必要だと分かり、今度は仕事を続けながら通院治療する方法を選んだ。「自分が納得できる生き方を過

ぐてはいけないため、県の疾病特別休暇制度を利用し、勤務時間は午前中の4時間。家族から「民間会社ならクビになる」と言われたこともある。休業補償制度や仕事をカバーする要員が十分でない

企業で働く人、パート従業員の立場の人は、自分のような働き方は現状では難しいだろうと思う。だからこそ、がんを早期発見することの重要性を訴える。「早く見つかれば治療にかかる期間も少なくなり、会社も復帰支援をしやすくなる。行政や企業は、がん検診の受診率を上げる取り組み

ごすために、仕事から離れたくないと思った」と話す。

放射線治療を毎日しな